

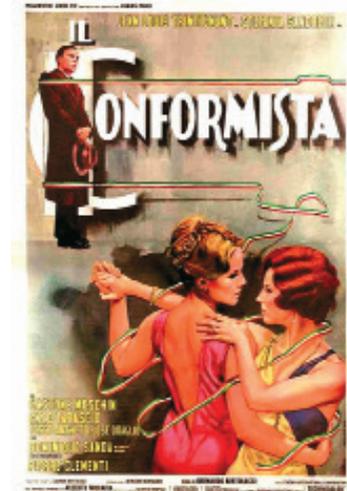
# 暗殺の森 ■ Il conformista 1970

ベルナルド・ベルトルッチ | BERNARDO BERTOLUCCI 1941-



▲ 矛盾に悩む男マルチェロ・クレリチが婚約者を訪ねる場面。

▼ 暴力と性とマルチェロの保守的な生来の性質がストーリーを進めていく。



ベルナルド・ベルトルッチの『暗殺の森』は知的サスペンスであり、ネオノワールでもある。原作はアルベルト・モラヴィアの1930年代を舞台にした小説。裕福だが深い自己矛盾を抱えるイタリア人官僚マルチェロ・クレリチが自ら進んでファシスト党の暗殺者になるストーリーを自在に翻案している。ベルトルッチは魅惑的な映像と、的確に積み重ねた知的要素によって、実験的であり政治的である映画を作りあげた。

ガストーネ・モスキンはクレリチの護衛を務めるファシスト党員マンガニエーロ役に危険な道化的要素を加え、ドミニク・サンダはクレリチの大学時代の恩師であり暗殺の標的であるクアドリ教授の妻アンナを演じて、誘うような官能性と心のもろさを醸し出している。また、ジャン＝ルイ・トランティニャンは人当たりのよさと、気取らない知性と、感情を隠している雰囲気はクレリチにぴったりで、分裂した母国の暴力的な歴史や、殺人や性に対する罪悪感や、裕福な生い立ちや精神的に不安定な両親のおかげで得た怪しげな特権によって、まともな人生から切り離された男の迷いをうまく形にしている。

ベルトルッチは原作の時系列を捨て、入り組んだフラッシュバックを用いることで、精神的な深さや、夢に見える演出や、粉々になった象徴的意味をファシズムの表現に加えている。また文学や映画の引用や暗示を多用することで、イタリアのファシズム信奉者の過去や、その現代への遺産や、政治への関与に潜む複雑な動機を幅広く追究している。WH

## 👁️ 見どころ



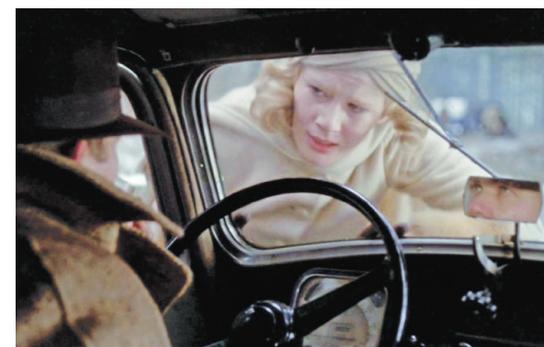
### 1 殺し屋の影

クレリチはパリのホテルの外でファシスト党員の暗殺共謀者マンガニエーロを待っている。フランスに亡命した標的、反ファシスト扇動者クアドリ(エンツォ・タラシオ)が逃げたのだ。クレリチはクアドリを追跡しながら、悩み続けてきた過去の重大な出来事を思い出し、その記憶がフラッシュバックで挿入される。



### 2 父親的存在

パリでクアドリを見つけると、クレリチは恩師の前で、現実と幻想のたとえとしてプラトンの洞窟の比喩を暗唱する。感銘を受けたクアドリは本物のファシストの口ぶりではないと言い、かつての教え子に抱いていた信頼を取り戻す。



### 3 「ブルータス、おまえもか」

クレリチとマンガニエーロは人里離れた冬の森でクアドリに追いつく。クアドリが複数の暗殺者に刺される場面はシェイクスピアのジュリアス・シーザーの暗殺場面を思わせる。アンナは車に乗ったクレリチに助けを求めるが、救われることなく殺害される。

## 🕒 ベルナルド・ベルトルッチ

### 1941-63

イタリアのパルマで生まれる。文芸評論家の父に映画監督でありマルクス主義の同志であるピエール・パオロ・パヴリーニを紹介され、映画『アッカットーネ』(1961)の撮影に参加。監督第1作『殺し』(1962)はパヴリーニの原案。

### 1964-70

『革命前夜』(1964)、『ベルトルッチの分身』(1968)、『暗殺のオペラ』(1970)、『暗殺の森』で急進左翼的な思想への関心とフロイト的強迫観念を追究し、国際的に高く評価された。

### 1971-77

『ラスト・タンゴ・イン・パリ』(1972)で高い評価を得て商業的な成功を収め、露骨な表現で世界的に有名になる。高額な制作費をかける大作に転向した『1900年』(1976)の興行成績は振るわなかった。

### 1978-93

『ルナ』(1979)でイタリア人脚本家クレア・ペプローと組み、その弟マーク・ペプローとプロデューサーのジェレミー・トーマスとともに『ラスト・エンペラー』(1987)を制作し、アカデミー作品賞等を受賞。『シェルタリング・スカイ』(1990)、『リトル・ブッダ』(1993)とあわせて(東洋3部作)と呼ばれる。

### 1994-

商業的にはあまり冒険しなくなったが、イタリアのトスカーナを舞台にした恋愛映画『魅せられて』(1996)や1968年への賛辞である『ドリーマーズ』(2003)など、個性的な作品を撮りつづけている。

## 青の映画

ベルトルッチは『暗殺の森』で一緒に仕事をした多くの仲間と、長く付き合うようになった。その一人が撮影監督のヴィットリオ・ストラロー(下)で、合計8本の映画をともに撮影した。ベルトルッチがストラローと話し合ったのは、主に光と色と構図についてだった。ベルトルッチはレンズとカメラの動き、そしてカメラと登場人物の関係については自分が選択するが、「その他のことはすべて撮影監督の領域だ」と語っている。『暗殺の森』はストラローに「青という色が伝える感情、その印象を発見する機会」を与えたのだ。青の冷たい色調とそこから連想される印象は作品全体に行き渡っている。それがパリで撮影された場面



の赤の温かみと、イタリアの町サバウディアに置かれた、ファシストが建てた建物の“セット”の途方もない巨大さとの対比を引き立て、1930年代イタリアのファシズム様式を映像で再現している。